

「小さな学校」の強みを生かす

子どもたちと交流する「よい」児童は刺激を受けています。違ふ考えを知り、世界が広がっている」と話す。教諭にとっても、他校の指導法を学ぶ良い機会になっているという。

少子化などを背景に全国で公立小学校の統廃合が進む中、少人数のまま独自の学校運営に取り組み自治体がある。学校には地域の拠点という役割もあり、統廃合にはマイナス面も。「小さな学校」の良さを生かし、特色ある運営で注目を集める兵庫県香美町を訪ねた。

山あいの豊かな自然の中にある村岡小に、約6キロ離れた兎塚小からスクールバスが到着した。町立の両校の2年生で「合同授業」を行ったためだ。

体育では村岡小の11人に兎塚小の12人が加わり、倍の人数でのド

「合同授業」注目集める

ッシボールに児童は大喜び。男子児童は「いつもは人数が少ないから、一緒にと楽しい」と笑顔を見せた。

算数はプリントを使った授業。児童23人を両校の教諭ら5人が指導した。教諭1人当たりの児童が4、5人になり、児童の理解の度合いによって授業を進められる。

村岡小の田路幸代教諭は「他校

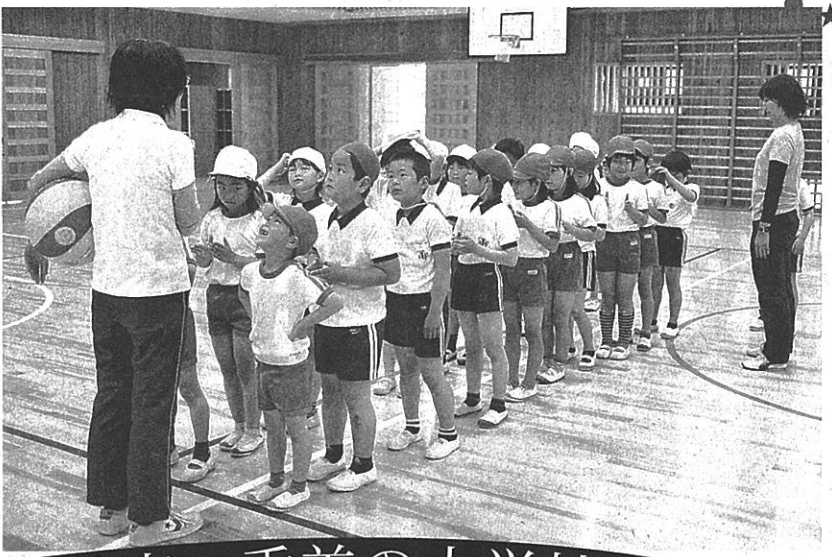
香美町の小学校10校のうち9校は、どの学年も1学級が複式学級だ。小規模校同士の合同授業は3年前に始め、近くの小校などでグループを組み、年10回実施。一般的に小規模校の課題とされる、集団活動への適応や切磋琢磨し合える環境づくりを合同授業で補いながら、少人数の強みを生かした学校運営を目指す。

学校の存続は、周辺地域の将来像とも密接に関わる。村岡小の石井一彦校長は「この地域では1970年前後に小学校が統廃合され、住民はそれから地元が寂れたと実感している」と話す。学校は学びの場というだけでなく、故郷の将来を担う人材を育て、防災や交流、子育ての拠点にもなる。香

美町は学校と地域が協力した「ふること教育」など、地元信頼される学校づくりに力を注ぐ。

小規模校の合同授業は広島県安芸太田町や徳島県阿南市などでも実施。徳島県教委は「統廃合に歯止めをかけたい」と話す。文部科学省の学校基本調査によると、近年は年間250以上の公立小が減少。統廃合などによって、標準規模とされる12、18学級は増加傾向だが、5学級以下の小規模校は減少してきている。

「合同授業」を終え、自分の学校に帰るためスクールバスに乗る児童ら。兵庫県香美町の村岡小学校



体育の「合同授業」兵庫県香美町の村岡小学校



2校の2年生の児童と担任らで行われた算数の「合同授業」=兵庫県香美町の村岡小学校



「合同授業」を終え、自分の学校に帰るためスクールバスに乗る児童ら。兵庫県香美町の村岡小学校

宮崎県五ヶ瀬町の教育長時代に小規模校の連携を進めた兵庫教育大学院の日渡口教授「教育行政」は「学力低下を理由に統廃合を進める例があるが、学力は規模の問題だけでは測れない」と指摘する。「地域でより良い選択をするために、教育環境なのか、財政問題なのか、何のための統廃合かをきちんと明らかにして議論できるような行政が環境を整えることが大切だ」としている。